

## もの言う牧師のエッセー 第110話

## クリスマス・ストーリー

### ②「京都のチョコ」

12月に入り今年のクリスマス商戦も本格的に火蓋を切った。高級百貨店サックス・フィフス・アベニューのホリデーギフト・ガイドを見ていたら、あるチョコレートが目にとまった。「マリベル」である。生前のスティーブ・ジョブズがこよなく愛し、セレブ御用達、NYタイムスで大絶賛されるニューヨークの高級チョコレート専門店である彼らが、今年の春、東京をすっ飛ばして京都の中心部、烏丸御池に日本一号店を出し、周囲を驚かせたのは記憶に新しい。

海外ブランドの日本進出の際は必ずと言っていいほど青山や代官山に出店するが、なぜ彼らは京都なのか。「驚いたのですが、マリベルさんのチョコの作り方は、京都の和菓子屋さんと同じだったんです。ミントやラベンダー風味のチョコを作る際、ミントは葉っぱを炊いて、ラベンダーは花と牛乳と一緒に炊いてチョコと混ぜます。発想が日本の和菓子職人と同じなんです。」とマリベルジャパンの岩城紀子社長。25種類の風味に加え、ガナッシュの表面一つ一つにポップなイラストを描き、さらにそのイラスト全てに詩を添付、そして金色のパッケージで包まれたそれはまるで宝石箱だ。そう言えば、料理の配膳や味覚に気を使い、商品それぞれに四季や土地の意味を持たせたり、真心の包装に手間暇かけるのは京都のお家芸だ。

聖書には、聖書とはおよそ無関係な東洋の人々が遠路はるばる中東までやって来て、世界最初のクリスマスギフトをキリストに献上した有名な逸話がある。

**「そしてその家に入って、母マリヤと共におられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」マタイの福音書2章11節**

とある。実はこれらは3品は「王への贈り物」として認知されているが、最も価値のある黄金はもとより、乳香は神への祈り時に焚くもの、そして没薬は死者に塗る薬、つまりやがて人類のために殺されるメシアへの埋葬の準備をしたものであり、これらがいかにキリストに相応しい贈り物であったかが分かる。そう、これら東洋の人々は“顧客”であるイエスに最高のギフトを送ったのである。そして京都のクオリティの高さもまた、商人らが長きに渡って宮家や公家などに最高の品々を提供してきたゆえであることに言を待たない。今年のクリスマス、愛する人たちへ、そして神であるキリストへ、最高のギフトを捧げよう。

2013-12-8

